

M&A専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2007 October 10月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション 石崎 路浩
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太
Keita Saito

本文写真 福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2007年10月1日発行 通巻156号

雑誌18321-10

定価2,310円 本体2,200円

RECOF

編集室から

BOOK

『国際経営講義』

——多国籍企業とグローバル資本主義——

ジェフリー・ジョーンズ著 安室憲一、梅野巨利訳
有斐閣 3700円(本体)



世界の歴史は分断から統合へ進む歴史である。大航海時代、産業革命、インターネット革命をへて、地球の時間的・空間的距離は圧縮されてきている。経済的にみれば、現代はグローバル資本主義の時代であり、牽引役は多国籍企業である。

多国籍企業とは2カ国以上で事業を行う企業のことである。簡単に言えば、本国以外の国に对外直接投資をし、生産やサービスの提供をする企業である。この言葉が使われるようになったのは、1960年と比較的新しいが、実体は19世紀に登場していた。独電機会社ジーメンズと米シンガーマシンが歴史上最初の製造業の多国籍企業だという。輸出に代えて外国に工場を設立していった。多国籍企業はこうして市場を確保する一方、受入国に雇用の機会、最新技術、経営ノウハウを提供していった。

グローバル化の波は、2度の世界大戦などで停滞するが、中国が開放政策に転じた1979年ごろから再び進展する。今日では世界で6万社の多国籍企業が80万社以上の海外関連子会社を支配しているという。バリューチェーンの様々な段階を世界中で展開する国際生産システムが構築されている。この結果、今では世界貿易の半分が企業内取引で占めるまでになった。多国籍企業のことを知らずして、世界経済を理解できないのだ。

多国籍企業やグローバル資本主義に対しては、富める国と貧しい国の格差を拡大したといった批判もある。著者も植民地主義など負の歴史を認め、勝者と敗者への分裂を生むとはしながらも、プラス面も評価する。何よりも多国籍企業は適切な制度的条件や公共政策の下であれば、富を創造する推進者として機能した。グローバリゼーションの結果、世界はより豊かで健全な場所になった。これに対し、20世紀に試みられた社会主義からは経済的成功を導くような代替モデルは生み出されなかった、というのだ。

最善ではないが、これが現実なのだろう。そうだとすれば、我々は多国籍企業や对外直接投資をもっと良いものにしていける必要がある。しかし、21世紀になっても、人類は多国籍企業を統治していくための国際法的な枠組みを未だに構築しえていない。世界貿易機関のような組織がある貿易と比べると大きく立ち遅れている。これが課題だと分かる。

本書は日本についても頁を割いている。外国から技術を移転して近代化を果たしたことや戦後の外資政策の流れなども分かる。対外、特に対内直接投資のレベルが低いことへの警告に素直に耳を傾けるべきだろう。

名前しか知らない欧米の多国籍企業の生成から発展のドラマがコラムなどで豊富に紹介されており、索引も詳細で多国籍企業事典として活用できる点も有り難い。著者は、経営史家でヨーロッパ独自の多国籍企業研究で有名な英レディング大学経済学部の中心メンバーだったが、最近、米ハーバード・ビジネススクールに招かれたという。米国が支配してきた多国籍企業理論の終りを告げるエピソードでもあると訳者らは指摘している。(青)

編集後記

昔の仕事仲間と読書会が始まった。土曜の午後なのに仕事が片付かず、遅れて2次会に駆けつける。食事をとりながらまだ議論が続いていた。課題図書は小田実さんの遺作となった『中流の復興』。格差社会を憂え、人間は競争をするために生まれてきたのではないと語っているのが心に強く残った。

小田さんのバックボーンは大学で学んだギリシャ古典文学だという。そんな小田さんに話を聞いてみたかった。「M&Aのことをどう思いますか」と。競争社会を生み出すものだ、と否定するだろうな。こう反論してみたかった。「だけれど、M&Aは経営資源の再配置、究極のリサイクルですよ。旧来の支配から解放し、新しい可能性を引き出す一面もあります。ギリシャの哲学者も万物は流転すると言っているじゃないですか」と。(開)

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室（03-3221-4942）までご連絡ください。